慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 農村救済と耕地拡張 |
| Sub Title | |
| Author | 気賀, 勘重 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1917 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.4 (1917. 4) ,p.534(106)- 544(116) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 雑録 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170401-0106 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

have it, when theare is no treaure lefte within the realme" と主張し、而して紙端に之を要言して Howe the Kynge can not haue treasure, when his subjects haue none. と謂へるは實に租稅の哲理を表明せるものなり。Bonar 曾て其 Political Philosophy and Political Economy に於て近世の經濟學は國家維持の手段として租稅制度を採用したるに始まると謂へり。（同書第三十五頁）果して然らば此對話篇は當に近世經濟思想史上の第一頁に記載せらる可きものなる可し。（大正六年三月十五日）。

（附記）本邦經濟學者にして此對話篇を引用したる嚆矢は福田博士なる可し（明治三十九年發行「內外論叢」第五卷第四、五號所載「アンダーソンの地代論」參照。本論文は「續經濟學研究」中に編入せらる。大正二年版、同書第二百五十二頁參照）。尙ほ同博士が近く「ヒュームの經濟學說」（「經濟論叢」所載）中此篇に關說せられたるは吾人經濟學書生の間に尙ほ記憶の新たなる所なる可し。

# 農村救濟と耕地擴張

氣賀勘重

## 一

昨年以來米價少しく騰貴し、爾餘の農產物亦戰爭の餘波を受けて多少の騰貴を致せるの結果言論社會に於ける所謂る農村疲弊の叫びは最近少しく靜まれるの狀あれども、併し一度足を農村に入れ若しくは農本論者の持說を叩く者は今尙ほ此聲を聞かざることなく、而して此等の農村悲觀者流に之が救濟の策を糺せば其所見は區々にして其要求する所は何れも大同小異なり。曰く農民の國家的社會的負擔過重なり宜しく之を輕減す可し。曰く、農村の金融狀態不良にして農事改良の資金に乏し、宜しく農村金融の便を計りて其開發に資す可し。曰く農民の智能低くして經營方法幼稚なり、宜しく之が改善を謀る可し。曰く我國農民の耕地過少にして充分其勞力を利用するの餘地なし、開墾の奬勵耕地整理の促進等に依り耕地の擴張を謀る可し。曰く何、曰く何と。其施策方針種々ある中にも最も重要視さるゝ一策は耕地擴張の促進奬勵なり。

農村疲弊の程度が果して論者の所言の如く甚だしきものあるやに就ては吾人は多少の疑を存せざるに非ずと雖も、此疑點に關しては吾人は既に昨年中帝國農會々報紙上に其所見の一端を公表せるが故に今日更に之を反覆せざる可し。併し疲弊の有無及び程度如何は暫く之を別問題とするも、兎に角我農村の經濟狀態の決して理想的に非ざるは疑もなき事實にして、此狀態を一層改善し農村人民の生活を一層裕福ならしむるは何人も之を望まざるなし。而して此見地よりして以上の諸策を觀れば何れも一見至當の施設たらざるなく、中にも耕地擴張の如きは工業に於ける資本の增加と等しく土地を主要の生產要素とせる農民の經濟狀態改善に取りて最も必要の手段たる可きこと復た言ふを要せざる可し。

## 二

蓋し我國の農耕地は六百萬町歩に滿たず、僅に全國面積の一割七歩强にして之を獨逸の四割三分七厘（牧畜用牧草地を併せて六割四分餘）佛國の五割四分六厘（牧草地と合計六割八分餘）が農耕地なるに比すれば其差霄壤の差あるのみならず、農業の衰廢を以て有名なる英國に比するも（英國の農地は全國の二割三分九厘、牧草地を併せて五割六分餘）遙に少なし。然るに之に反して農民の數は非常に多く全國人口の六割餘を占めて、英國の八厘は勿論獨逸の三割三分佛國の五割に比し遙に多きものあり。其結果、農家一戶の經營面積は甚だ狹少にして平均一町歩强に過ぎず。所謂る五反百性は全國に充滿し一町歩以下の經營に從事する小農、過小農は實

に全國農家の七割强を占む。獨佛に於ける一町歩以下の零碎農が農家總數の四割强に過ぎざるに比すれば我が農村に於ける農地過少の嘆あるも眞に宜なりといふ可く、其疲弊救濟の策として農地擴張の頗る適策たるの感あるも正に當然の次第といふ可きなり。

農はいふ迄もなく土地を以て主要なる資本とするもの、從つて農家各戸の見地より觀れば五反の農地が一町と爲り、一町の農地が二町に增加せば其經營より生ずる收益は增加す可く其經濟の安易と爲り鞏固となる可きこと復た論なかる可きも、然かも一個の農村、一地方の農民全體より觀れば斯の如きは其經營方法の同一にして勞力の供給亦此經營に適せる場合のことのみ換言すれば農村に人口の過剩、從つて勞力の過剩の充分に存在し、其增加なければ其過剩勞働者が空しく拱手して時日を空費するが如き事實ある場合に限れり。敢て我農村の多數に於て事實上斯る勞働者過剩あるや否や。勿論局部的には斯る村落も多少存す可しと雖も、大多數の農村に於ては縱令ひ季節的に多少の過剩勞働を見ることある可しと雖も、全年を通じて多大の過剩勞働者を見るが如き事實は吾人之を認むるを得ざるなり。歐洲諸國の農村に比すれば我農民の產地面積は過少の觀なきに非ずと雖も、勞力の供給否な各種生產要素存在の實狀に應じて之に適する經營法の自ら攻究實施さるゝに至るは各種產業の常、從つて我農業の經營法も常に其地方に於ける農地の狀態と人口の多寡とに適應して各地方それ〴〵に適當なる經營法の自ら發達せるに至れるものなり。敢て甚だしく無用の勞力の存在する地方あるなし。單に歐州諸國に比し農地面積少なきの故を以て直に農民餘りて農地足らずと斷言するは少しく早計に失するものに非ざるなきか。

勿論土地には集約的經營の或る程度以上に發達せる限り收穫遞減の法則の行はるゝものあり。而して我國の農業用地の最大部分が既に此法則の實現を見るの程度以上に集約的に經營されつゝあるの事實は吾人之を認めざるに非ず。從つて假りに一歩を讓りて論者の言の如く我耕民の耕地過少なるが故に、其疲弊救濟の途は先づ之を耕地擴張に求めざる可らずとするも、其擴張の途如何を顧るに於ては吾人は此方策に多きを望むを得ざるものあるを覺えざるを得ず。蓋し耕地にして護謨の如くそれ〴〵に延展擴張し得可きものならば卽ち其擴張亦頗る容易なる可しと雖も、耕地は勿論護謨に非ず。或は耕地整理に依る耕地の增加といひ或は荒蕪地の開墾といひ何れも其擴張は從來耕されざりし新たる土地の開拓に之を待たざる可らず。然かも斯る開拓し得可き土地が農村各地に點在して各其村落の過剩勞働を直に此處に利用し得るが如き事實ありとせば此政策は頗る適當のものなる可しと雖も、斯の如きは事實上例外の場合に過ぎず斯る開拓し得可き土地は多くは人口稠密なる耕村より遠く距れる山間原野等僻陬の地に存在するものなるが故に開拓に依る耕地增加は之と同時に其增加耕地を經營す可き農民を他より移住せしむるの覺悟ならざる可らず。換言すれは耕地增加に依りて耕村の經濟狀態を改善せんとする場合には他の一方に於て從來の農村に於ける農民の數を減ずるの事實を伴はざるを得ず。蓋し然らざれば過剩勞働者利用、農家經濟改善の實は之を擧ぐるを得ざる可ければなり。耕地擴張が新地開拓の外なく、而して其新地開拓は舊來の農村に於ける農民の減少に待たざる可らざるものなりとは、所謂る農村の疲弊救濟の策として猥に之を補助し奬勵す可きものなりや否や惟ふに耕地擴張奬勵論者と雖も少しく傾首せざるを得ざる所なる可し。

## 三

由來耕地擴張の熱心なる主張者は耕地整理を以て其一手段と見做すの風あれども、耕地の整理其物は實際上著しく耕地を增加せしむるものに非ず。往々耕地整理統計の上に現はるゝ顯著なる耕地增加は單に不完全なりし過去の測量を一層精確にせるより生せる計算上の增歩か然らざれば之に伴ふて行はれたる原野開墾の結果に外ならず。而して其實行には多大の經費を要し殊に林野開墾の面積多大なる場合には其經費の特に著しきものあるを常とす。此に於てか耕地整理といひ將た單純なる開墾といひ何れにしても耕地擴張の實施奬勵には多大の資本を要するものと覺悟せざる可らず。果して然らば之に要する資本の程度如何を惟はずして漫然耕地の擴張を絶叫するは又確に疑問たらざるを得ざる可し。

一國一村の上より觀るも將た農民各自の上より觀るも耕地の增加の頗る望ましきこと勿論なりと雖も然かも多くの地方に於て其增加が實際に行はれずして以て今日に至れるは畢竟其の行され難き事情の存せしが故に外ならざる可く、而して其行はれ難き事情は要するに其地方の土地既に開拓し盡されて復た新に拓く可きの餘地なきに在るか、將た資本の供給不充分にして開墾に要する多大の經費を投入し得るものなきに在るか、或は勞力の供給足らざるに在るなり。

今我國の土地に就て之を觀るに國内一般に山岳連亘し農耕に適するの平地少なしと雖も、農商務當局の調査に據れば既耕地約六百萬町歩弱の外、傾斜十五度以下の平地にして開墾に依り耕地と爲し得可き面積尚五百餘萬町歩存在せりといふ。果して然らば我が農耕地は一國全般を通じて現狀の約二倍に增加し得可き計算なり。土地供給の上より觀て決して新に拓き得可き餘地なしといふを得ざるが如しと雖も、併し此等の土地の開墾には多大の經費を要するものあり



金融機關の漸次完備し來れる今日若し其開墾事業にして有利ならんには之に投ず可き資本も亦之を蒐集する敢て困難に非ざる可しと雖も、然かも其投資の今日の如く微々たる所以のものは何ぞや。惟ふに多くの未開墾地は其開墾に比較的多大の經費を要し、其開墾は他の事業に於ける投資に比し割合に利益少なきが故に外ならざる可し。故に若し斯る事情の下に於て或は國家の補助奬勵に訴へ、或は資本家の公德心に訴へ特に此耕地擴張の事業に投資せしめんとするの論者あらば、そは他の一層有利なる農業其他の事業に投ず可き資本を割きて之を此比較的收益少なき事業に投せしめんとするの士に外ならざるなり。由來資本は生産の一大要素、既存の資本を比較的最も有利なる事業に投ずるは資本家其人の利益なると共に國民經濟其物に取りても亦最も其富力を增進する所以なり。一萬圓の資本を投じて年純益五百圓の土地を開墾するよりは同一資金を投じて年純收入八百圓千圓を生ずる工業又は農事改良に投ずるは一國全般の上より觀て遙に有利なるものなり。之を是れ思はずし單に耕地の擴張を希望し、開墾事業を目して公益事業國益事業とし漫然之が促進を希望する論者の如きは經濟の何物たるを解せず、農業あるを知りて國民經濟あるを知らざる短見者流に非ざるなきか、耕地の擴張は望む可く充分に之に投ず可き程の潤澤なる資本の供給頗る望ましき次第なれども、他の一層有利なる事業を捨てゝ先づ此利益少なき事業を敢行せよと勸むるは少しく經濟思想ある者の口にし得る所に非ざる可し。世間の資本家は決して一部農本論者の信ずるが如く非國家的非公益的の徒輩のみに非ず。耕地擴張事業にして眞の有利ならば復た敢て之が投資實行を躊躇するものに非ず。彼等の之を實行する者少なく、所謂る耕地擴張事業の發達遲々として不振の狀に在るは彼等資本家亦經濟

上の一隻眼を有するが故に外ならざるなり。

加之、勞働者供給の上より觀るも漫然たる耕地擴張論には頗る疑はしきものなきに非ず。蓋し我が農村の一部分に人口過剰、勞力過剰の觀あるは疑なき事實なりと雖も、斯る地方に於て新に開墾し得可き土地の充分に存在する場合は甚だ少なし、否な殆ど絶無の有樣なるを常とし開墾し得可き原野の存するは人口過少一般に勞力の不足を感ずるの地方に在り。換言すれば人口過剰の觀ある農村地方に於ては其土地は平地は勿論丘陵山岳の絶頂迄も既に開墾されて頗る集約的なる經營法の行はれつゝあるを常とし、其過剰人民の爲に新に耕地を得んが爲には遠く距れる人口過少林野豐富の地に移住せしむるの外なき有樣なり。是を吾人が前節に於て所謂る耕地の擴張に依り農村の疲弊を救濟せんが爲には舊來の農村の人口を減少せしめて之を他の新開地に移住せしめざる可らずといへる所以なるも如かも此農民の移住移植の促進は其實行頗る困難なる問題にして又特に農村救濟の爲に之を補助奬勵するは甚だ疑はしき問題に屬せり。

蓋し農民の新開地移住は都市への移住と異なり、先づ其定住地の撰擇の困難を感じ、次に其住宅の設定一年間の家計資金準備に困難を感じ子弟の教育、友交娯樂の亡失に苦痛を感じ、新住地の風土氣候に慣熟するに困難を感ずる等其決行甚だ容易ならざるものあり。故に資本家の先づ立ちて開墾を試みんとする者あるも、其新開地の經營に當らしむ可き適當なる農民の移住を招致するは資本の調達以上更に一般困難を感ずるの常なると共に、更に農民より觀れば鄉土に於ける其生活甚だしく困難に陷れる者か然らずんば一時の空想に驅らるゝ猪突的の年少子弟に非ざる限り容易に移住の決心を爲さゞるの常なり。工業商業其他の方面に職を轉じて自家の新進路を開拓せんとする者は兎に角、鄉土に於けると等しく農業に依りて其身を立てんとする農民は一般に鄉土愛着心甚だ強くして容易に他鄉に轉ずるを好まざるの風あり。如上の移住に伴へる困難と農業其物の性質とより觀れば蓋し當然視す可き自然の傾向といふ可く晩近農村子弟の都市移住熱頗る高きに反して新開地移住の希望割合に少なきも惟ふに亦此傾向の結果に外ならざるなり。然れば農家一戸當りの耕地面積を增加せしめて以て所謂る農村の困難を救濟せんが爲に、農村子弟の移住を促進するの策は其途を都市への移住に求むるに於ては或は割合に容易なる可きも之を新開地の開拓に求むるに於ては效果頗る疑はしきを覺えざるなり。從來歐洲先進國に於て都市移住の趨勢の旺盛なるを憂ふるの論者少なしとせざれども此等の邦國に於てすら此移住の爲に農村人口の絶對的に減少せるは僅に英國あるのみ。其他の邦國に於ては農村の人は常に多少增加せるが若しくは靜止の狀態に在るなり。農業移民の爲に農村人口の減少せるが如きは吾人殆ど其例を見ざるなり。果して然らば歐洲農民よりも鄉土愛着心の一層强烈なる我農村人民に對し其農業移住に依りて人口の減少を致すに至らんことを望むが如き蓋し架空の想像に過ぎざる可し。一般の農村救濟策として此內地移住策の賴む可らざる又知る可きなり。

## 四

假りに一歩を讓りて、新開拓地の充分なる擴張と之に對する農村人民の移住とに依り現下の農村人口を幾分か減少せしめ、其一戸當りの耕地面積を增加せしめ得可しとするも、農村救濟といふ見地よりすれば此農民減少が果して實際に困難解除の實を得るものなるや否やは又頗る疑なきに非ず。蓋し相當の發達を遂けたる農村に於てはそれ〴〵其地方に於ける土地の廣狹と資本及び勞力の供給狀態に適應して粗放集約種

々の程度の農業經營法のそれ〴〵に發達せるものあり。人口稠密の農村に頗る集約的なる園藝的の農業發達し、土地廣漠人烟稀少なる僻遠の農村に粗放的なる主穀及び放牧的の農業の行はれつゝあるは即ち之が爲なり。故に若し都市又は新開地への移住の結果として其地方の人口に減少を來たし、勞力の供給從來よりも減少するに至らんか、其地方の農業經營は爲に一變して從來よりも粗放的なる農業經營法に移らざるを得ざるに至らん獨逸の東部諸州に於ける農業の經營が農民移住の爲に頗る困難に陷り、經營法を粗放的にせざるを得ざるの農業家續出するに至れるは最近の一例なり。

由來粗放的經營より集約的經營に移るは農業の進歩にして之に逆行するは農業の退歩と目せらる。然るに農村人口の減少は動もすれば以上の危險ありとせば漫然たる耕地擴張、移住促進の議論は結局農業の進歩發達を呪ふの議論と爲らざるを得ざる可し。當今我が農村の人口は之を歐米に比すれば過剩の觀なきに非ずと雖も、之を今日我が農村に行はるゝ經營法に對して果して左程過剩なるや否や。農村人民中勞働の機會なく所得の途なきに苦む者果して甚だしく多數なるや否や。思ふて此に至れば當今の經營法の行はるゝ限り眞に人口の過剩に苦むの農村は甚だ少なきの感なきを得ず。現に最近戰時工業の盛大なるに伴ひ、一時の高賃銀に誘はれて職を工場に求むる農村子弟の漸く增加するや、由來人口の稠密を以て有名なる阪神地方の農村に於てすら勞力不足に困難を感じ農業の荒廢を憂ふる聲ありとの事實の傳へらるゝあるに非ずや。農村經營の方法改良せられ勞力に代ふるに機械又は役畜を以てするの風一層發達し、經營方法從來よりも一層集約的となりて然かも尙ほ舊來の勞力に餘剩を生ずるが如きに至らば農民の減少、耕地面積の增加共に農村の振興に資す可しと雖も、先づ經營法を改善せずして漫然耕地の增加を策するが如きは決して農村振興の途に非ざる可し。

或は農業經營方法の上に斯る惡結果なしとするも、移住に基づく農民の減少は必ずしも農村疲弊の救濟又は其振興の原因と爲るものに非ず蓋し前述の如き困難を冒して進んで移住する者は老幼婦女の徒に非ずして概ね將來に富むる靑年子弟に外ならず。換言すれば舊來の農村を去るは所謂働盛りの少壯者流にして鄕土殘留するは多く老少其他勞働力に乏しき徒輩ならざるを得ず。故に人口は縱令著しく減少することなしとするも多數の移住民を出す場合には其農村に於ける人口平均の勞働能力は著しく低下せざるを得ず。其結果は自ら生產の減少となりて現はる可く其農村一般の經濟狀態は從來よりも改善せられずして却つて改惡さるゝに至らざるを得ざる可し。此意味に於ても亦移住に基づく農民の減少は決して農村振興の手段に非ずして却つて其困難を加ふるの手段たる感なきを得ざるなり。

熟ら〳〵農業の進歩農村の發達の跡を尋ぬるに、人口の增加又は欲望の發達に基因せる生產增加の希望先づ起り此に生活難經濟不如意を感じて之が解除緩和の手段方法を求むるに至り、苦心經營の極經營法の改良と爲り集約的經營の發達と爲りて農村生活の改善其經濟の發達を見るに至るの常なり。艱難汝を玉にすとの格言は啻に個人の上のみならず農村の發達否な工業其他一國產業の發達の上に於ても亦爭ふ可らざるの眞理なり。英國工業の發達の裏面には其前驅として慘憺たる工業難の歷史あり、獨逸農業の發達には其前驅として米露の競爭に基ける農業難の歷史あること等しく世人の知了する所なり。此點より觀れば我が現在に於ける所謂農村疲弊、農業困難の叫びは驅て來ん農業經營法の

變更、改善、農村の進歩發達を促す可き一個の好衝動に非ざるなきか。何れにもせよ、單に農村疲弊の聲を聞きて精密に其由來をも究むることなく、漫然耕地の擴張を策し其眞價を顧みざるが如きは吾人の贊するを得ざる所なり。

五

勿論斯く云へばとて吾人は敢て耕地擴張の政策其物に絶對に反對するものに非ず。目下の人口增加の大勢より觀て可及的之を奬勵するは必要と認むる所なれども、收支如何をも顧慮せず猥に之が促進を謀るが如きは吾人の贊する能はざる所たるのみ。

實際に過剩なる人口の處分策として、一部農村に於ける人口增加に伴へる困難の緩和手段として耕地の擴張は正に一策たる可し。然れど之に多きを望み、現下の農村人口一戸當りの耕地面積を增加するの策として之を主張するは既に其主義に於て疑ふ可き所あるのみならず、其實行上に於ても將た又其結果の上に於ても大に疑はざるを得ず。惟ふに現今に於ける農村の疲弊救濟又は農村振興の途は此耕地擴張よりも寧ろ他の方面殊に農業經營法の改善、農村に於ける勞働組織の改善等の方面に之を求む可きに非ざるか。現に我國各地の農村を觀るも耕地面積の多き所必ずしも裕ならずして、裕なる農村は却つて耕地面積狹き地方に多きの實あるは即ち之を證するものに非ざるか。一言以て識者の考慮を煩はすものなり。

# 史上より觀たる世界主義（上）

占部百太郎

左の一編は余が本誌三月號に其大要を紹介したホルランド ローズ博士の「近世史上に於ける國民主義」中の第十講「世界主義」Internationalism を譯したるものである。歐洲大戰の終末は今尙豫見することは出來ないけれど、戰後に於ける講和問題及び之に關聯したる永久的世界平和の研究は今後益々盛むになるであらう。ローズ博士の所說が、日本に於ける是等の問題研究者に取て多少裨益する所ある可きは、余の信じて疑はざる所である。

戰爭の時期と平和の時期とは必然交互に到來するものであるが、是れは人類の幸福を希望する凡ての人々の穿鑿心を刺戟するであらう。戰爭は男性的道德に取て必要なる學校なりとの（現に獨逸に流行する）ベルンハーデイの所見を是認せざる限り、戰爭の定期に起ると云ふ事は困つた徵候である。人間の進歩は戰爭によるよりも、平和に依て多く遂げらるゝことを信ずる人々は、確に戰爭を避く可き方法は發見せられざるや否や、而して其方法は首尾能く適用せられざるや否やの研究を怠らぬであらう。余は此に歷史の敎訓に照らして、此問題の研究を試みやうと思ふ。

從來此種の研究はわけて長い慘憺たる戰爭の末に方つて盛であつたが、法の威力及び平和の爲の是等の盡力は、畢竟、戰爭に對する恐怖の度と並行するものであると云つても、過言ではあるまい。

此眞理は國際法の開祖フゴー・ファングロート（グロチウス）の場合に徵して明白である。「宗敎戰爭」を墮落せしめたる殺伐なる時世に人と爲つたる此の和蘭の學者は、當時人類を苦しめたる全然弛廢したる綱紀に就て熟考した。今日獨逸の爲に苦しめる白耳義人、波蘭人若くはセル